



推奨とは何ですか？



臨床で解決したい問題（クリニカルクエスチョン）に対して、回答の形で作成される文章。

推奨とは、クリニカルクエスチョンに対して、特定の医療行為を「実施することを勧める」かどうかを示す文章です。ガイドラインの最も大切な部分です。

ガイドラインの多くは「どれくらい勧めるか」という尺度を4つのレベル（強さ）で示しています。「実施しないことを勧める」と「実施することを勧める」という方向を示し、それぞれの方向について「強く勧める」か「弱く勧める（条件付きで勧める）」かという2種類の強さを示します。

この4つのレベルを決めるときには、益（利益）と害（弊害）のバランスの大きさなどを評価します。ふたつの医療行為AとBのうち、Aの方がBよりも益が大きく害がより小さいとき、Aが問題なく推奨されます（強い推奨）。しかし、Aの方がBに比べて益が大きい代わりに害も大きい場合には、より慎重にAとBを比較検討する必要があります（弱い推奨）。また、推奨の作成にあたっては、システマティックレビューで提示された益と害のバランスやエビデンスの確実性に加え、他にも考慮すべき事項があります。

ひとつは、患者さんの価値観と希望の多様性です。益と害のバランスを評価するためには、益と害にどの程度の重きを置くかという価値判断が重要です。したがって、患者さんが一般的にはどのような価値観と希望を持っているかということが、推奨の作成にあたって重要な情報となります。

もう一つは、実施される医療行為にまつわるコストを含んだ経済的な視点です。診療ガイドラインが、介入の費用をまったく考慮しないで高額な検査・治療などを推奨する場合、患者さんや社会全体に大きな経済的負担を強いることになります。したがって、診療ガイドライン作成にあたっては、医療行為の費用等についても考慮することが望ましいといえます。

